Osaka University Knowledge Archive

Title	レコンキスタの起源について(2) 論文紹介 : A. ベスガ・マロキン著、「8世紀のアストゥリアス王国」
Author(s)	大内, 一
Citation	Estudios Hispánicos. 2020, 44, p. 69-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98051
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

レコンキスタの起源について (2)

論文紹介:A. ベスガ・マロキン著、「8 世紀のアストゥリアス王国」

大内　一

イベリア半島に関する歴史研究の重要なテーマのなかで、「レコンキスタ」ほど専門家の間で議論の対象になったものはない。「レコンキスタ」という単語そのものは、19 世紀の自由主義的スペイン・ナショナリズムの形成期に歴史用語として用いられるようになったが、その概念は早ければ 8 世紀半ば頃、遅くとも 9 世紀下四半期には存在していた。その後、「レコンキスタ」の概念は、スペインの歴史の様々な時期に、時の政府指導者や政治家によって特定の政治目的を達成するためのイデオロギー的道具として利用されてきた。この例として、フランコ期における「スペイン・ナショナリズム」や「ナショナルカトリシスモ」と「レコンキスタ」の概念との関係性を思い浮かべれば十分であろう。もっとも、フランコ期の負の記憶を踏まえ、現在では、「レコンキスタ」の概念からイデオロギー要素を切り離し、「レコンキスタ」を単なる現象として理解しようとする傾向が広まっている。

「レコンキスタ」の起源についても、重要な議論が行われた。近代歴史研究におけるこのテーマの議論は、1965 年に公刊されたマルセロ・ビヒルとアビリオ・バルベロの共同研究を出発点としている。彼らは、文献資料と考古学的証拠に基づいて、半島北部諸部族がローマ化及びキリスト教化をほとんど受け入れず、原始的な固有の社会構造に執着し続けたとする仮説を立て、ローマに対する抵抗姿勢を西ゴート人に対しても維持していた北部諸民族が、新たな侵略者であるアラブ人の支配に対しても同様に抵抗したことが「レコンキスタ」の起源であると解釈されてきたと結論づけた。この見解にしたがうと、「レコンキスタ」の起源は、西ゴート王国の復興やイベリア半島のカトリック世界の回復といった政治的、宗教的理由に求められるのではなく、経済的、社会的発展を目指す半島北部の諸部族による拡大運動のなかに求めるべきものとなる。

この仮説は大きな反響を呼び、数多くの歴史教科書にも「レコンキスタ」に関する新たな通説的理解として掲載されるまでに至ったが、近年の実証的

研究成果を踏まえ、この見解に修正を加える研究者たちが現れた。その一人がアルマンド・ベスガ・マロキンである。彼はビヒルとバルベロの「アストゥリアスとカンタブリアは西ゴート人に征服されなかった」とする見解に対し、アストゥリアス王国のヒスパノゴート起源説を唱えて対抗した。

本稿は、レコンキスタに関する研究史の整理の一助とするため、論文紹介として *Estudios Hispánicos* 43 号に掲載したアルマンド・ベスガ・マロキンの論文「8 世紀のアストゥリアス王国－レコンキスタの起源－(1)」の続訳である。

*　　*　　*　　*　　*

8 世紀のアストゥリアス王国－レコンキスタの起源－(2)

アルマンド・ベスガ・マロキン

最初の危機：フルエラ 1 世の治世

757 年、フルエラ 1 世[32] が父王の跡を継いで即位した。このことは、アストゥリアス君主制の世襲的性格を示すもう 1 つの証拠である。フルエラ 1 世については、王だったか否かについて疑念を抱く余地はない。というのも、759 年のサン・ミゲル・デ・ペドロソ女子修道院の建立証書に王と記されているからである。アストゥリアスの君主たちの王としての地位については、アストゥリアス諸年代記によって明確に証言されることになるが、それ以前について証明されていないのは、ただ単に諸年代記より古い文書資料が見つかっていないからである。しかし、フルエラ 1 世からアルフォンソ 2 世[33] までの王たち（現存する数少ない史料でも国王として記されている）の王としての地位を、今までと同様に否定し続けることは、アストゥリアス王国に関する歴史研究において多くの誤謬と混乱が生み出したある種の演繹的推論だ

32　第 4 代アストゥリアス王（在位 757-68 年）。アルフォンソ 1 世とペラーヨの娘エルメシンダの間に生まれた。初代アストゥリアス王ペラーヨの孫にあたる。

33　第 9 代アストゥリアス王（在位 791-842 年）。フルエラ 1 世とアラバ出身のムニアとの間に生まれた。初代アストゥリアス国王ペラーヨの曾孫にあたる。

けを根拠とするにすぎない。

一方、ベロラド村とほぼ同じくらいの緯度の場所に前述の修道院が建立された事実は、この時期における王国拡大の兆しを示しているように思われる。イスラム教徒の残した史料によると、アルフォンソ1世の収めた数々の勝利は、彼の息子のフルエラによるものであった。フルエラ1世は、父王の政策をうまく継承することができた。というのも、コルドバの独立アミール国の誕生を意味した756年のアブド・アッラフマーン1世[34]の即位が、半島の状況を根本的に変えるものではなかったからである。実際に、この後ウマイヤ朝の初代アミールは、756年に獲得した権威に実効性をもたせるために、その治世全体（788年まで）を費やさなければならなかった。

しかし、フルエラ1世の治世は、拡大ではなく（『アルフォンソ3世年代記』によれば、ガリシア地方で拡大が続いていた）内部問題によって特徴付けられる。フルエラ1世は、ガリシア人が起こした反乱とバスク人による反乱を鎮圧しなければならなかった。バスク人に対する勝利の結果、フルエラ1世は、捕虜あるいは人質であったアラバ出身の女性ムニアと結婚した。この結婚は、王国最東部地域との脆弱な紐帯を強化することに貢献したため、政治的性格をもつことは明らかである。しかし、フルエラ1世は統合したばかりの辺境領域の問題だけを抱えていたわけではなかった。宮廷では、弟ビマラが彼に対して陰謀を企てたが失敗し、命を落とした。フルエラ王は最終的に768年、臣下の手によって殺害された。

このことは深刻な危機、アストゥリアス王国にとって初めての危機を表している。拡大により生じたと解釈し得る危機である。ほんの数年の間に、アストゥリアス王国は支配領域を大きく増やしていたが、そこには発展度が大きく異なる地域を内包していた。その発展度は王国の東部から西部に向かうにつれて高くなり、ガリシア地域は、西ゴート王国に完全に統合されていた関係で最も階層化された社会であった。その対極は西バスク地域であった。西バスクは、西ゴート支配下のスペインの周縁部に位置しており、その社会は最も原始的であった。この状況が包含する矛盾は、アストゥリアス・レオ

34　後ウマイヤ朝の初代アミール（在位756-88年）。ウマイヤ朝の第10代カリフであるヒシャーム・イブン・アブドゥルマリクの孫。750年のアッバス革命の難を逃れモロッコからイベリア半島に渡り、756年にアラメダ戦いに勝利してコルドバに入り、ダマスカスのアッバス朝カリフから独立したアミールを名乗った（後ウマイヤ朝の成立）。

ン王国の歴史を通して後に明らかになるのだが、アルフォンソ1世の拡大政策がもたらし、王国の統合に貢献した利益の陰に隠されてしまった。しかし、少なくとも戦利品を容易に獲得できる見込みがなくなると、それらの矛盾は表面化することになった。

アストゥリアス諸年代記は、その危機がフルエラ1世の性格に起因するとしている。しかし、同王は必要であると考えたことを積極的に行っただけかもしれない。国王を賞賛することを目的とするいくつかの年代記は、フルエラ1世に対する批判的評価や、とりわけ同王の暗殺が罰せられることなく正当化されていることに驚きの念を示している。フルエラ1世が暗殺された結果、アルフォンソ1世の弟で傍系のフルエラ・ペレスの子孫が即位することになった。このフルエラ・ペレスは、『アルフォンソ3世年代記』によると、アルフォンソ1世の軍事的成功にとって重要な役割を果たした人物であった。その息子のアウレリオ[35]が従兄弟にあたるフルエラ1世の後を継いで即位したのである。彼の治世と弟ベルムード1世[36]の治世は、この傍系が最終的に勝利を収めるための決定的な道標となった。この家系は843年に始まり今日まで続いている。アストゥリアス諸年代記は、ベルムード1世の曾孫でフルエラ・ペレスの玄孫のアルフォンソ3世の治世に作成されたが、『アルフォンソ3世年代記』のロダ版は当のアルフォンソ3世偉大王によって編集された（少なくとも着想された）可能性が高い。このことは、イスラム教徒の著述家たちによって高く評価された国王、アストゥリアス王国のどの君主より重要な国王というアルフォンソ3世のイメージを説明している。

怠惰な国王たち？

768年のフルエラ1世の死と791年の彼の息子アルフォンソ2世（フルエラ王とバスク人女性ムニアと間に生まれた）の即位の間の四半世紀は、アストゥリアス王国の歴史全体の中で最も暗い時代である。アストゥリアス諸年代記は、この時期に相次いで即位した4名の国王についてほとんど何も語っていない。さらに、いくつかの国王名簿では、これらの国王のうちアウレリ

35　第5代アストゥリアス王（在位768-74年）。アルフォンソ1世の弟フルエラ・ペレスの子で、暗殺されたフルエラ1世の従兄弟にあたる。

36　第8代アストゥリアス王（在位789-91年）。アルフォンソ1世の弟フルエラ・ペレスの子でマウレガト王の従兄弟にあたる。

オ王以外の3名の国王の名前が削除されている。そして、後世の歴史学は、1000年前に描かれたこの路線にそのまま従ってきた。これらの治世についてほとんど研究して来なかっただけでなく、これらの王たちを非常に否定的に評価し、いわゆる怠惰王たち、すなわち100年以上もの間を無為に過ごしたメロビング朝末期の怠惰王たちと比較したのである。

このような非難の主な理由は、これらのアストゥリアス王たちがイスラム教徒との間で平和を維持したという事実にある。年代記作者たちはこの側面を強調した。しかし、この批判は必ずしも的を射ていない。なぜなら、この時期にはまだレコンキスタの概念が存在せず、レコンキスタを実践しないという理由で王たちを非難すべきでないからである。

しかしながら、今までに何度も語られ、今も書物に記されているように、この平和は朝貢金を支払うことを通してアンダルスから買われたものであると考えることはさらに間違っている。この状況は、この数十年間の歴史学の脱神話化傾向の限界にとって、結果的に非常に重要である。なぜなら、「100人の乙女」の貢ぎ物の伝説までもが信じられていたが、その虚偽性（そこには悪意が感じられる）は明らかだからである。キリスト教徒が残した史料にもイスラム教徒側の史料にも、朝貢金の支払いを示す証拠が全く見られないことは確かである。バロー・ディーゴやサンチェス・アルボルノスといったアストゥリアス王国に関する偉大な歴史家たちは、誰一人としてそのような伝説に類する憶測を信用しなかったが、その一方で、そのような臆測を信じただけでなく、それをこの時期のアストゥリアス王国の歴史を理解するための不可欠な論拠とする研究者もいた。これらの研究者は、アストゥリアス王国の支配者層が、和平とそれが内包する服従を支持する集団とイスラム教徒との戦争を支持する集団に別れており、後者はアルフォンソ2世が即位してようやく勝利を収めることができたと考えている。

そのうえ、朝貢金を支払ったという仮説には必然性がない。アンダルスとアストゥリアス王国との間の和平は、双方の国力の脆弱性の結果であり、この脆弱性は和平を説明するのに十分な理由である。アブド・アッラフマーン1世の治世は、長期にわたる一連の反乱によって特徴付けられたが、これらの反乱はほとんどの場合、彼が押しつけようとした新しい権威に対する抵抗運動であった。したがって、従属アミール時代の内戦がこの時期にも続いていたと言える。実際、791年以降、ヒシャーム1世がアストゥリアス王国に対して大規模な攻撃に転じたのは、存在しない朝貢金の支払いが断たれたか

らではなく、今まで述べてきたように、半世紀が過ぎて始めてアンダルスが攻撃に転じる環境を整えたからであった。

この脆弱性は同様に、アストゥリアス諸王の行動をも説明する。私たちが研究した危機は、768年のフルエラ1世の暗殺事件で終わったわけではなかった。なぜなら、危機はそれほど単純に終わるはずがなく、フルエラ1世がその危機の元凶でもなかったからである。さらに、フルエラ王の暗殺によって危機が悪化したと推測することができる。というのも、暗殺事件は王家の分裂を招いたのみならず、フルエラ1世を支持した貴族勢力も存在したに違いないことから結果的に支配者層全体の分裂をも引き起こしたと断言できるからである。また、危機自体の性格も変化したと考えることができる。この時期の奇妙な王位継承のあり方は、この理解に確証を与えるものである。フルエラ1世を継いで即位した従兄弟のアウレリオ王の後を継いだのは、フルエラ王の妹アドシンダの配偶者のシロ[37]（在地のアストゥリアス人の可能性がある唯一の王）であった。これには、王家の両系統の和解の意図が働いたのかも知れない。アドシンダは子宝に恵まれず、甥のアルフォンソ（後のアルフォンソ2世）に王位を継承させようと意図したが、シロ王がこの世を去ると、アルフォンソ1世の庶子（したがってフルエラ1世とアドシンダの異母弟）のマウレガト[38]が蜂起して王位に即いた。そして、マウレガトが死去すると、彼の従兄弟でアウレリオ王の弟のベルムード（1世）が王位を継承した（843年以降は、彼の子孫が途切れることなく王位に即くことになる）。しかし、奇妙なことに、ベルムード1世は即位して3年で退位し、王位をフルエラ王の子のアルフォンソに譲った。これにより、フルエラ1世の暗殺によって始まった王位継承問題は収束した。この世代間に生じた王位継承の特異な経緯に関する基本的な一つの説明は、暗殺されたフルエラ王の子が国王となり、父王の暗殺を画策した首謀者に報復するかも知れないという恐怖のなかに見出すことができる。その首謀者たちは、791年には歴史の舞台からすっかり姿を消してしまうことになる[39]。

37　第6代アストゥリアス王（在位774-83年）。ペラーヨの娘エルメシンダとアルフォンソ1世の娘でフルエラ1世の妹アドシンダの夫君。

38　第7代アストゥリアス王（在位783-89年）。アルフォンソ1世の庶子。

39　原注18。この四半世紀の継承順位は、アストゥリアス・レオン王国全体の歴史のなかで、世襲的君主制の論理に当てはまらない唯一の奇妙なケースである。したがって、世襲とは別の論理がいくつか表明されているが、一つの論理がこの↗

アウレリオ王の治世（768-774年）については、アストゥリアス諸年代記は、アウレリオ王が自ら鎮圧しなければならなかった奴隷の反乱を伝えるのみである。しかし、この出来事は非常に重要である。なぜなら、スペインの歴史のなかで唯一の奴隷反乱であり、世界中で知られている数少ない奴隷反乱のうちの一つだからである。また、アストゥリアス王国の社会が、従来から言及されてきた土着的特徴（その根拠は理論上に過ぎない）から如何にかけ離れていたかを示した点で意義深いものであった。この反乱については、今までに、様々な状況の下で数多くの異なった説明がなされており、それらはこの反乱の奴隷的性格を否定しようとするものであったが、共通して史料的根拠を欠いていた。アストゥリアス王国の支配領域に奴隷が存在したことは紛れもない事実である。タキトゥスの『ゲルマニア』によると、ゲルマニア人はすでに奴隷を所有していたし、フランクおよび西ゴートの史料によると、バスク人は6世紀と7世紀に行った侵略によって奴隷を獲得していた。したがって、カンタブリアとアストゥリアスが西ゴート王国の一部でなかったという誤った理解にたっても、両地域に奴隷が存在していた可能性はある。さらに、アルフォンソ1世が、ドゥエロ川流域への遠征の際に同地域の住民を半島北部に移住させたとするアストゥリアス諸年代記の記述があるが、その住民の中には奴隷がいたに違いない。また、ヨーロッパの他の地域でも見られたように、戦争が勝利者に対し奴隷を提供し続けていたことも忘れてはならない。この意味において、アルフォンソ2世が812年にオビエドのサン・サルバドール教会に下賜した奴隷の中に、バスク人の名を持つ者が多く見られたことを思い起こさなければならない。彼らは戦争奴隷であったに違いない。したがって、以下が最も重要な結論なのだが、西ゴート期のスペインあるいは当時のフランク王国のように、アストゥリアス王国の社会においても、国王自身の介入を余儀なくするような大きな反乱を引き起こすのに十分な数の奴隷が存在していたのである。

↘ 時期に実施された王位継承のいずれかをうまく説明できたとしても、アストゥリアス王国で生じた王位継承の大部分を説明するのに役立つことはできなかった。いずれにせよ、スペイン北部の諸部族の推測上の母系家族制の名残りとされる間接的母系家族制により、アストゥリアス諸王の王位継承を説明しようとすることに何ら根拠がない。なぜなら、例えば、ローマ帝国の最初の皇帝家系で生じたこと（ローマ帝国では帝位継承の半分は舅から婿への継承であった）と違って、婿が義父から王位を継承することはけっしてなかったからである。

シロ（在位 774-783 年）は主都をプラビアに移したが、このことは、王家に無関係なこの人物の出自と関連していたのかもしれない。アストゥリアス諸年代記が記しているように、シロは王女アドシンダとの婚姻によって王位に即いたのであった。新たに生じた反乱が彼の治世における最も重要な出来事となった。この反乱はガリシア人によるものであったが、シロ王によってルゴ近郊のクベイロ山において鎮圧された。

アストゥリアス諸年代記で最悪の扱いを受けているのがマウレガト王（在位 783-788 年）である。これにより、同王は後に「100 人の乙女」の朝貢を行った張本人であると伝説で語られることになる。年代記作者たちは、マウレガト王の即位の非合法性を強調することだけに関心を示していた。彼の即位は二重の意味で非合法であったと思われる。一つは、アルフォンソ 1 世と女奴隷との間に生まれた庶子だったとされることである。もう一つは、『アルフォンソ 3 世年代記』が、世継ぎのいなかったシロ王と王妃アドシンダがフルエラ王の子アルフォンソに王位を継がせようと準備していたところ、マウレガトがアルフォンソから王位を奪ったと明記していることである。しかしながら、この事実関係はけっして明白ではない。また、アルフォンソ 2 世の母ムニアが奴隷だった可能性があり、その場合、アルフォンソの出自そのものが非合法となるのである。そのうえ、『アルフォンソ 3 世年代記』によると、宮廷はすでにアルフォンソを国王として宣言していたようだが、宮廷内の大多数の支援がなかったならば、それまで遠ざけられていた庶子のマウレガトが、後に貞潔王と称されることになる甥のアルフォンソから、その父王の死後四半世紀もの間、いかにして王位を奪い得たのかについて十分に理解できない。

そのうえ、マウレガト王の治世は重要であった。アウレリオ王の治世が歴史研究の広い分野にわたって想像されていたのとは異なる社会を垣間見せてくれているのに対して、マウレガトの治世は、幾度となく想像されたように、原始的な山岳民のものではない文化的パノラマを明らかにしている。イベリア半島における聖ヤコブ崇敬の痕跡が初めて確認され、マウレガト王に献じられた詩の中で聖ヤコブがヒスパニアの守護者とされたのもまさにこの時期であった。このことは、コンポステーラにおいて聖ヤコブの墓が発見されるという奇跡を告げる前触れであった。リエバナのベアトゥスは 786 年に有名な『ヨハネの黙示録注解書』を著したが、これは、モサラベの他の著述家の作品と比べて、8 世紀のキリスト教世界において最も普及した書物であ

った[40]。しかし、最も重要なことは、マウレガトの治世に、アストゥリアス教会がモサラベ教会に対して決定的な勝利を収めたことである。当時のヒスパニア教会の首座大司教であったトレドのエリパンドゥスは、異端であるキリスト猶子説を庇護していたが、リエバナのベアトゥスは、ローマ教皇あるいはカロリング教会より早く、このエリパンドゥスの異端説を糾弾した。ベアトゥスは785年に『弁証論』を執筆し、エリパンドゥスを論駁したのである。この勝利の意義を強調することは重要である。なぜなら、神学は当時の中心的な学問であり、この神学論争に勝利したことは、今まで主張されてきたように、アストゥリアス王国の文化がモサラベの文化と比べて決して劣っていないことを証明することにほかならなかったからである。そのうえ、アストゥリアス教会がそれまで制度上従属していたモサラベ教会との関係を断つことを可能にしたからである。

アストゥリアス諸年代記は、ベルムード1世（在位788-91年）の3年間の治世について、同王による例外的な退位を簡潔に言及するのみである。そして異口同音に、同王の退位が自発的なものであったことを強調している。そのなかで『アルフォンソ3世年代記』は、ベルムード1世自身がアルフォンソ2世を後継者に選んだと述べ、さらにこの奇妙な退位劇の説明となることがらについて言及している。それは、『アルフォンソ3世年代記』オビエド版のなかで思い出したかのように唐突になされた記述、すなわちベルムード王が助祭であり、そのために王国を統治するに能わない旨の記述である。しかし、これは、アルフォンソ2世が修道士であった可能性を考慮すると、なおさら信頼できない。『アルフォンソ3世年代記』ロダ版には、ベルムード1世は偉大な愛に恵まれ、791年に長寿を全うしたと記されていることを考慮すると、この歴史的経緯の奇妙さは増すばかりである。

どの程度かを特定することは不可能であるが、すべての状況が、アストゥリアス諸年代記のベルムード1世の退位に関する叙述に何らかの操作が加えられていることを示している。アルフォンソ3世の時代では、黙殺する方が

40　原注19。その重要性は非常に大きく、ホセ・アンヘル・ガルシア・デ・コルタサルは、「ベアト・デ・リエバナのこの著作は、カンタブリアが成したヨーロッパの歴史に対する大きな貢献であると誇張することなく言うことができる」と述べている。"Cantabria en los años 450-1000", *Cántabros, la génesis de un pueblo,* Caja de Cantabria, Santander, 1999、p.235. さらに、ベアト・デ・リエバナの諸作品は、大量の蔵書の存在を明らかにしていることも述べておかねばならない。

好ましい意味内容をこのエピソードがもっていたのかも知れないと言うことを考慮しなければならない。なぜなら、アルフォンソ3世はベルムード1世の血統であり、アルフォンソ2世はその名を記憶に留めるに相応しい偉大な国王であったからである。確かなことは、ベルムード1世が退位する直前の791年に被った軍事的な大敗北について、アストゥリアス諸年代記が沈黙していることである（『アルベルダ年代記』はこのブルビアの戦いについて言及しているが、その勝敗については意図的に述べていない）。この年、非常に敬虔なイスラム教徒であったヒシャーム1世（在位788-796年）は、兄弟たちとの争いを制してアンダルスにおける権力を確立すると、アストゥリアス王国に対して2度にわたって遠征を行った。これにより新たな時期、すなわちアストゥリアス王国にとって最初で最後の経験となる存続をかけた戦い（795年まで続く）の時期が始まったのである。これは新たな時代の始まりでもあった。なぜなら、それまで散発的であったキリスト教徒とイスラム教徒の対立が、これ以降は不可逆的なものになったからである。791年の攻撃はアラバに対して行われた。イスラム教徒の残したいくつかの史料によると、攻撃はカスティーリャに対しても行われたようである。しかし、ガリシアに対する遠征は、これらよりずっと重要な意味をもっていた。イスラム教徒軍が遠征から引き上げる際、ベルムード1世自らが指揮するキリスト教徒軍がエル・ビエルソ地域のブルビアで彼らを急襲し、大敗を喫したのであった。これは、アストゥリアス王国がそれまでに被った敗北のなかで最大級のものであっただけでなく、アミール軍が帰途にあったことを考慮すると不必要な敗北であり、ベルムード自身の責任に帰すべきものであった。そのような状況において、この大敗北とその直後の国王退位との関係を見過ることはできない。長年にわたり宗教生活を送った後にようやく王位に即いたベルムード1世が、自らの軍事的能力の欠如を自覚して退位を決意したということは十分にあり得たことである。あるいは、この敗北に不満を抱いた貴族層の圧力に耐えきれず、王位を去ることを決意したのかもしれない。またあるいは、王位を放棄し宗教生活に戻ることを余儀なくするようなクーデター（最初のものでも最後のものでもなかったであろうが）が生じたのかもしれない[41]。いずれにせよ、史料が沈黙を守っていることがらについて、これ以

41　原注20。この仮説を立証する史料はない。しかし、手掛かりは存在する。最初の手掛かりは、退位の叙述が生む疑惑のなかに見出すことができる。その他の手掛かりは、権力を取り戻すためにベルムードの家族が中心となって起こしたと思↗

上は語ることはできない。

最後に、このような危機に見舞われたにも関わらず、ホセ・マリア・ミンゲスが指摘するように、この時期をとおして再植民活動による南部への進展が続いていたに違いないと言うことができる[42]。私たちは「私的再植民」[43]の時代の話をしており、この「私的再植民」活動は当時の国王政治とは無関係であったことを考慮しなければならない。

アルフォンソ2世の治世の初期

791年のアルフォンソ2世の即位によって、アストゥリアス王朝の連続性が確立された。768年の時点で、アルフォンソ2世はまだ10歳に満たない少年であり、暗殺された父王フルエラ1世の王位を継承することができなかった。それどころか、宮廷を去りサモス修道院に逃れなければならなかった。そこでの滞在は、よく知られた彼の純潔性と新ゴート主義に大いに影響を及ぼしたと思われる[44]。アウレリオ王が世を去ると、新王シロと王妃アドシンダは甥のアルフォンソを宮廷に呼び戻し、アルフォンソの即位が容易になるように、彼に宮廷の運営を委託した。しかし、783年にマウレガトがアルフォンソの即位を妨害し、アルフォンソは母方の親類とともにアラバに逃れなければならなかった。この不運なアラバ滞在がアルフォンソの人格形成に貢献したのみならず、アストゥリアス王国が彼の長期にわたる治世（791-842年）により大きな凝集力を得ることにも貢献した。

↘ われる複数回に及ぶクーデターのなかにある。アルフォンソ2世を早くも失脚させた801年のクーデターは、その一つだと思われる。このクーデターについて、『アルフォンソ3世年代記』は何も記しておらず、言及する唯一の史料の『アルベルダ年代記』は、例外的なことに、その首謀者について記していない。もっともこの首謀者が、この時代に王位を望むことがでる唯一の存在であった王族と無関係な人間であると考えることはできない。もう一つのクーデターは、ベルムードの子でアルフォンソ3世の祖父のラミロが843年に起こしたクーデターである。このクーデターは、アルフォンソ2世が次期国王にと指名したネポシアーノから王位を奪うことになる内戦を引き起こした。

42 原注21。*Historia de España,* Vol. III, ed. Planeta, Barcelona, p.143.

43 アルフォンソ1世によるドゥエロ川流域への遠征直後から9世紀半頃にかけて、ドゥエロ川流域北部で見られた農民による自発的な再植民活動。無主地の占有をとおして、最終的に小土地所有自由農民を生み出した。

44 原注22。A. Besga Marroquín は、"La estancia de Alfonso II en el Monasterio de Samos", *Boletín del Real Instituto de Estudios Asturianos,* Vol.56, N°.159, 2002, pp.201-218 のなかでこの仮説について論じている。

ビザンツ皇帝を模倣していた西ゴート王や751年以降のフランク王のように、アルフォンソ2世は791年9月14日に聖油により聖別され王位に即いた。この日付は、8世紀のアストゥリアス王国の歴史のなかで、月日まで明確に判る唯一のものである。しかしながら、その時点でアルフォンソ2世純潔王がかつての儀礼を復興させたと断言することはできない。なぜなら、これを伝える史料がそれ以前の即位の仕方について一言も語っていないからである。重要なことは、アルフォンソ2世が新ゴート主義政策を展開したことであり、これについては『アルベルダ年代記』の作者が次のような有名な文章を記している：

> *教会や宮廷における制度などのゴート人の秩序全体を、かつてトレドで見られたように、オビエドに完全に復興した。*

新ゴート主義とは反対の政策の存在を想定して、新ゴート主義政策はアルフォンソの治世の当初から行われたのではないと以前からしばしば主張されているが、それを裏付ける史料的根拠はなく、そう考える理由もない。

この政策のイデオロギー的、芸術的な具体化の成果（史料不足を考慮すると、これも最良の証拠である）は、オビエドの発展の中に見いだすことができる。アルフォンソ2世はオビエドを真の意味での王都に変えたのであった。純潔王が生まれ故郷のこの場所を新たな主都に選んだのは、恐らくはそれまでの国王の根拠地に自分に敵対した貴族が根を下ろしていたからだと思われる。国王権力の新たな中心地は、多分に新体制の始まりを象徴しており、アルフォンソ2世の手による数多くの熟慮された建造物がこの新体制を特徴付けるのに役立ったであろう。

しかし、アルフォンソ2世の治世の初期には、別の懸念が彼の注意を引いた。ヒシャーム1世が北伐政策を継続したのである。その時ほどイスラム教徒がアストゥリアス王国の存続を脅かしたことはなかった。ヒシャーム1世の用いた手段や求めた目的を考慮すると、恐らく彼はその滅亡を狙っていたと思われる。オビエドは二度も略奪され（オビエドの歴史にとって唯一の出来事）、アルフォンソ2世はもう少しで捕虜になるところであった。792年には攻撃の矛先はアラバに向けられた。翌793年に和平協定が結ばれたが、それはヒシャーム1世がカロリング朝下のカタルーニャとフランス南東部を攻撃するためであった。ヒシャームは794年には再びアラバとアストゥリア

スを攻撃の対象とした。795年には二度にわたって遠征軍を派遣した。一度目はアストゥリアスに向けて、二度目はおそらくガリシアに向けてのものだった。796年には、カスティーリャとおそらくはカンタブリアが侵略された。アストゥリアス王国にとって幸いなことに、その年にヒシャーム1世が他界し、アンダルスは新たな危機に陥った。そのうえ、ヒシャーム1世がキリスト教徒に対して示したような強い決意をもつアラブ人の君主は二度と現れることはなかった。アストゥリアス王国は攻撃に耐えて存続することに成功しただけでなく、アルフォンソ2世はいくつかの大勝利を収めた。なかでも、794年にオビエドを略奪した直後のイスラム軍に対して勝利したルトスの戦いは重要である。さらに、ヒシャーム1世による北伐が収まると、アルフォンソ2世はこの状況に乗じてリスボンを攻撃した。そして、これまでアストゥリアス王国が行ったなかで最も大胆な作戦を実行し、797年あるいは798年にリスボンを占領し略奪に成功した。これらは、イスラム教徒の戦略の失敗（その後の数世紀においても成果を生まなかった）だけでなく、8世紀末の時点でのアストゥリアス王国の堅固さを明らかにするものである。

この時期にアルフォンソ2世がカール大帝と外交関係（フランクの史料によって確認されている）を結んだことを重視しなければならない。この外交関係は従属関係それも臣従関係によるものであると満足げに繰り返してきた研究もあるが、この見解は根拠がなく真実ではない[45]。この外交関係（史料によると795-798年に限定される）が重要だったとは思えない。なぜなら、アストゥリアス王国の国際的孤立の歴史の中のほんの短い中断期間に過ぎな

45　原注23。この見解は、広く普及したにも関わらず、フランスの歴史学会では反響を呼ばなかった。この見解は研究の産物でないと言うことを述べておかなければならない。アルフォンソ2世が派遣する自国の特使に対し「自分をカール大帝の臣下と称するように」と指示したらしいと述べる『カール大帝伝』の著者エインハルドゥス（アインハルト）の言葉を唯一の根拠としているに過ぎない。そのうえ、この叙述は、西洋の他の諸王がキリスト教世界の一部のみを統治する一人の皇帝の優位性を認めていることを示そうとした一節のなかに組み込まれている。否、アルフォンソ2世に関する前述の内容を記した後に、諸王がカール大帝の優位を認めていると述べるのである。エインハルドゥスは、実際にはカール大帝と何ら関わりのないスコットランドの諸王がカールの奴隷であり臣下であると宣言したと記している。この話しは非常に意味深い。それは、アストゥリアス諸年代記に批判的な研究者たちが、エインハルドゥスの著した『カール大帝伝』のような大いに操作された作品をいかに信頼しているかを示しているからである。また同時に、過去の神話を別の神話に置き換えることがいかに好まれるかをも示している。もっとも、これは別の話しである。

いからである。フランク王国との外交関係がもつ主たる意味は、外交関係自体がアルフォンソ2世のそれ以降の治世が裏付けるアストゥリアス王国の成熟度を示していることであろう。もっとも、その事実はフランクの歴史の一部なのである。

ヒスパノゴート王国としてのアストゥリアス王国

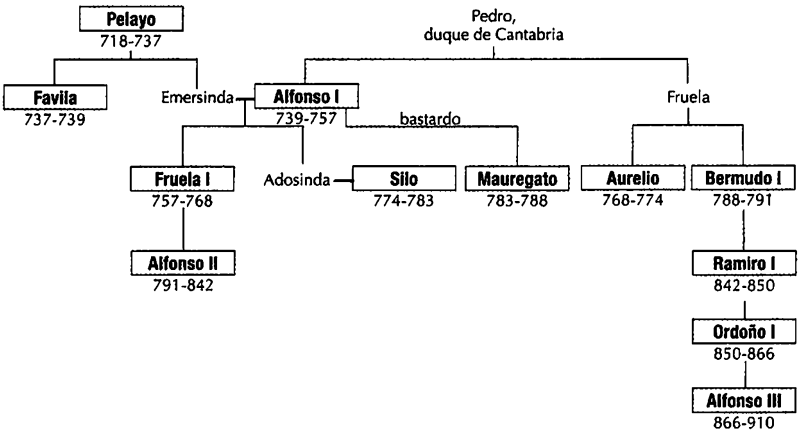
結論として、8世紀すなわち新ゴート主義が勝利を収める前のアストゥリアス王国の歴史は、アストゥリアス王国がヒスパノゴート王国であったことを示している。それ以外の形では存在できなかったのである。なぜなら、アストゥリアスとカンタブリアが西ゴート王国を構成する地域であったからである。さらに、アストゥリアス王国がヒスパノゴート王国（とりわけローマを起源としている）を起源とすることが、新ゴート主義の醸成を説明するのである。新ゴート主義は、アンダルスから移住してきたモラサベの影響によるものではなく、アストゥリアス王国の社会の独自的発展によるものであった。こうして、アストゥリアス王国の歴史はスペインの歴史と完全に一体となり、両者は互いに今まで以上に理解しあえるものとなる[46]。

しかし、このことは、9世紀末のアストゥリアス諸年代記の作者たちが意図したように、「アストゥリアス王国が西ゴート王国の継承国である」ということを意味するものではない。西ゴート王国はイスラム教徒のイベリア半島征服により滅亡した。そのうえ、アストゥリアス王国は、イスラム教徒の度重なる攻撃を前にして示した強さと、困難な状況の下で本質的に植民的性格の領土拡大を通して表明した活力が示すように、西ゴート王国とは性格を異としていた（西ゴート王国は、フランク王国を除く他のゲルマンの諸王国と同様、一つの戦争で消滅しうる王国であり、イベリア半島における定住が完了した後は、その国境線は固定化していた。その主な理由は植民的推進力を欠いていたからであった）。しかしながら、アストゥリアス王国が西ゴート王国の継承国であったことは明らかである。なぜなら、その起源についてもさることながら、もしヒスパノゴート王国が存続していたならば出現したであろうスペインと（西洋キリスト教世界の他の社会と比較しうるという理

46 原注24。パンプローナ王国のようなより土着的性格の強い君主制のなかにも、ヒスパノゴートを起源とする重要な諸要素を見ることができると言うことを示しておく必要がある。A. Besga Marroquín, "Orígenes hispanogodos del Reino de Pamplona", *Letras de Deusto,* 89, pp.11-53 を参照されたい。

由で）大きく違わないと思われるスペインをアストゥリアス王国が最終的に作り上げたからである。

したがって、アストゥリアスで誕生した新たな王国が、かつての西ゴートスペインの支配権を法的に主張できなかったとしても、レコンキスタについて合法的に語ることはできるのである。もちろんそれは、少なくとも西洋的な観点からである。



アストゥリアス王国の国王家系図（**718-910** 年）

抜粋史料

イスラム教徒の史料に見るコバドンガの戦い

1.（ウクバーは）スペイン総督の地位を得て、ヘジュラ暦 110 年（728-29 年）にスペインに到来しそこで数年間を過ごした。その間、ナルボンヌに至るまでのこの国全域を征服した。山岳地域を除いて、ガリシアとアラバとパンプローナを支配下においた。ガリシアでは征服を免れた村落は一つもなかった。山岳地域には、ベライ（ペラーヨ）と称する王が 300 名の部下と共に逃げ込んでいたが、イスラム教徒は彼に対し止むことなく攻撃を加えて追い詰めたので、彼らの多くは飢え死にし、他の者は（降伏して）服従を誓うまでになっていた。語られるところによると、こうして彼らは 30 人にまで減少し、女性の数は 10 人に満たなかった。彼らは砦に立て籠もり蜂蜜を食糧としていた。なぜなら、岩の裂け目に集まっていたミツバチを飼っていたか

らである。イスラム教徒が彼らに近寄ることは困難であった。そこで、イスラム教徒は「たった30人で何ができようか」と言って彼らを放置した。彼らを軽視したのであるが、後に述べるように、このことは、神の思し召しにより非常に重大な事態を引き起こすことになった[47]。

2. イブン・ハイヤーンは、かつてガリシアの地でペラーヨと言う名のキリスト教徒の悪漢が反乱を起こしたと語っている。ペラーヨは、キリスト教徒の臆病を叱り、報復と自国の防衛のために立ち上がるよう訴えてキリスト教徒を鼓舞し、うまく彼らに反乱を起こさせた。その時以来、以前は全く行っていなかったことであるが、キリスト教徒は自分たちの住む地域からイスラム教徒を排除し、自分たちの家族を守り始めた。山岳地域を除いて、イスラム教徒はガリシアのすべての町や村を征服していたが、山岳地域にはこのキリスト教徒（ペラーヨ）が逃げ込んでいた。彼の仲間たちは飢えのために命を落とし、およそ30名の男性と10名の女性が残るのみであった。彼らには蜂蜜しか食糧がなかった。彼らは岩の割れ目に巣くっていたミツバチを飼っていたのである。そのような過酷な状況のなかで、彼らは砦に立て籠もっていた。イスラム教徒は、そこに近寄るのが困難だと考え、「たった30人で何ができるのか」と言って、キリスト教徒たちを軽視した。周知の通り、その後、キリスト教徒たちは力をつけて、領地を獲得するに至ったのである[48]。

『アルベルダ年代記』による8世紀のアストゥリアス王国

アストゥリアスにおいて、最初にペラーヨがカンガスを拠点に18年にわたって王国を統治した。すでに述べたように、彼は西ゴート王ビティサによってトレドから追放されアストゥリアスにやって来た。ヒスパニアがサラセン人に占領されて以来、ペラーヨがアストゥリアスにおいてサラセン人に対して反乱を起こした最初の人物であった。ユースフがコルドバで統治し、ムヌーザがヒホンにおいてアストゥリアス人に対するサラセン人の支配を実施していたときのことである。敵であるイスラム教徒は、司令官アル・カマ

---

47 Emilio Lafuente y Alcántara, *AJBAR MACHMUÂ* (Colección de Traducciones), Madrid, 1867, p.16.

48 Al-Makkari, *Nafh at-tib min gusn al-Andalus ar-ratib wa dikri waziriha Lisan Addin b. Al-Hatib* (Exhalación del olor suave del ramo verde del Alándalus e historia del visir Lisan ed din ben Aljathib), en Francisco Pons Boigues, *Los historiadores y geógrafos arábigo-españoles* (*800-1450*), Madrid, 1898, p.418.

共々ペラーヨによって壊滅させられ、司教オッパは捕虜となり、ムヌーザも最後には命を落とした。こうして、その時からキリスト教の民衆に自由が戻ってきた。そのうえ、この戦いで死から免れたサラセン軍の兵士たちは、神の裁きにより、リエバナの山中で山崩れに遭い、押しつぶされて命を落とした。そして、アストゥリアス人の王国が神慮により誕生した。ペラーヨは、775年（737年）[49]にカンガス（・デ・オニス）でこの世を去った。

ペラーヨの子ファビラは2年間王国を統治した。彼は軽率にも熊に襲われて命を落とした。

ペラーヨの娘婿アルフォンソは、18年間王国を統治した。彼はカンタブリア公ペドロの子であった。アストゥリアスを訪れたとき、ペラーヨ自身の発意で彼の娘ヘルメシンダを娶った。アストゥリアス王国を受け継ぐと、神のご加護を得て多くの戦いを行った。そのうえ、敵の支配下にあったレオンとアストルガを意気揚々と占領した。ゴート人の平野と呼ばれた地域のうちドゥエロ川までの一帯を荒廃させ、キリスト教徒の王国を拡大した。彼は神と人々に愛された。

アルフォンソの子フルエラは11年間王位にあった。数々の勝利を収めたが、過酷な勝利であった。王国をめぐる争いでビマラと言う名の弟を殺害した。その後、残忍な性格が災いし、彼自身も806年（768年）にカンガスにおいて殺害された。

アウレリオは7年間王位にあった。彼の統治期に、主人に対して反乱を起こした奴隷たちが彼によって捕らえられ、元の奴隷に戻された。さらに彼の統治期、将来の王（シロ）がフルエラ王の妹アドシンダを妻とし、彼女と共にその後に王位に即いた。アウレリオは天寿を全うした。

シロは9年間王位にあった。彼は王位に即くと宮廷をプラビアに移した。母のためにヒスパニア[50]と和平を結んだ。プラビアで天寿を全うしたが、子供を残さなかった。

マウレガトは、非合法的に権力を得て即位し、5年間王位にあった。

49　アルベルダ年代記ではヒスパニア暦が用いられている。ヒスパニア暦は、6世紀後半以降、聖イシドルスの著した『ゴート人、バンダル人、スエビ人の歴史』やアストゥリアス諸年代記など、イベリア半島の年代記に広く用いられた。西暦より38年古く表記される。カスティーリャ王国ではフアン1世により1384年に廃止された。

50　ローマ以来のヒスパニアの地の大部分を支配していた当時のイスラム・スペイン世界を指す。

ベルムードは3年間王位にあった。その3年間、彼は常に寛大で敬虔であった。彼の治世期の829年（791年）に、ブルビアにおいて戦いがあった。その直後に彼は自らの意志で王位を退いた。

アルフォンソ大王は51年間王位にあった。…アラブ人に対して数々の勝利を収め、アストゥリアスのロドスにおいては、ベルベル人の軍隊を打ち破った[51]。

『アルフォンソ3世年代記』ロダ版に見る757年から781年のアストゥリアス王国

785年（757年）、アルフォンソの死後、彼の息子のフルエラが王国を継承した。逞しい気力を持つ男子であった。数多くの戦いに勝利を収めた。ガリシア地方のポントゥビオにおいてコルドバの軍勢と戦い、そこで5万4000人のイスラム教徒を殲滅した。ウマールと言う名の騎馬隊長を生け捕りにし、その場所で首を刎ねた。反乱を起こしていたバスク人たちを打ち負かした。そのなかからムニアと言う名の女性を妻に娶り、彼女との間にアルフォンソをもうけた。彼に対して反乱を起こしたガリシア人を打ち負かし、ガリシア地方全体を屈服させ大きく荒廃させた。ビティサ王の時代から司教たちの妻帯が慣例となっていたが、この悪習を終わらせた。そのうえ、この悪習を止めない多くの者を、鞭打ちの刑に処した後に修道院に閉じ込めた。こうして、この時以来、司祭が妻帯することが禁止されたのである。なぜなら、司祭たちが教会規則を遵守すれば、教会が大いに発展するからである。さらに、彼の治世において、ガリシア地方ではミーニョ川まで植民が進んだ。この王は残忍な行為をする人物であった。自らの手で弟のビマラを殺害した。ほどなくして、神は弟と同じ運命を彼にお与えになり、彼は臣下によって殺害された。806年（768年）のことである。彼はそれまで11年3月の間王位にあった。

彼の死後、甥のアウレリオが王位に即いた。彼の治世に、隷属民たちが領主に対して反乱を起こした。しかし、王の機敏な対応により打ち負かされ、彼らは全員が元の隷属身分に戻された。この王は一度も戦争をしなかった。イスラム教徒との間に和平を結んだ。彼は6年間王位にあった。811年9月に病により命を終えた。

---

51 José Luis Moralejo（Traducción）, *Crónicas asturianas,* Universidad de Oviedo, 1985.

アウレリオの死後、シロがアルフォンソの娘アドシンダと結婚し、これにより王位を得た。彼はアラブ人と和平を結んだ。ガリシアが彼に対して反乱を起こすと、クベイロ山で戦いを始めた後にそれを打ち破り、ガリシアを彼の帝国に服従させた。彼の統治の間、フルエラの子でアルフォンソ大王の孫のアルフォンソが宮廷を差配した。なぜなら、シロとアドシンダの間には子がなかったからである。シロは9年間王国を統治した後、821年（783年）に天寿を全うした。

シロが他界すると、宮廷のすべての大貴族と王妃アドシンダは、アルフォンソを亡父の王国の王位に即かせた。しかし、アルフォンソ大王と女奴隷の間に生まれた子でアルフォンソの叔父にあたるマウレガトが尊大にも反乱を起こし、アルフォンソ王から王位を奪い取った。アルフォンソは彼から逃れてアラバに向かい、そこで母方の親類に匿われた。マウレガトは非合法的に奪い取った王位に6年間あった。そして、826年（788年）に天寿を全うした。

マウレガトが他界すると、ベルムードが国王に選出された。彼はフルエラの子で、アルフォンソ大王年代記のなかで彼の弟とされる人物である。このベルムードは偉大な人物であった。3年間王国を治めたが、聖職者であったので、自らの意思で王位を退いた。その際、かつてマウレガトにより王位を追われた甥のアルフォンソを後継者に指名した。大いなる愛と長寿に恵まれたのち、829年（791年）に天寿を全うした[52]。

52 José Luis Moralejo（Traducción）, *Crónicas asturianas,* Universidad de Oviedo, 1985.